埋蔵文化財

紫明小学校保管の考古資料について

熊井　亮介

１　はじめに（図１・写真１）

本件は、北区小山東大野町の京都市立紫明小学校で保管されている考古資料（以下、本資料）に関する資料紹介である。

本資料は遺存状況が良好であり、完形もしくはそれに近いものを多く含む。点数は破片のものも含むと38点あり、接合すると36個体分の資料となる。種類としては、土師器・須恵器・埴輪・鉄器があり、時期は古墳時代中期から平安時代に及ぶ。

大まかな経緯については令和３年度に報告したものの、紙幅の関係もあり本資料の詳細等には触れられていなかった[1)]。これを踏まえ、拙稿では本資料の詳細について報告を行うとともに、令和３年度報告の以後に行った追加調査成果について触れ、最後にその意義についても若干の検討を加えていきたい[2)]。

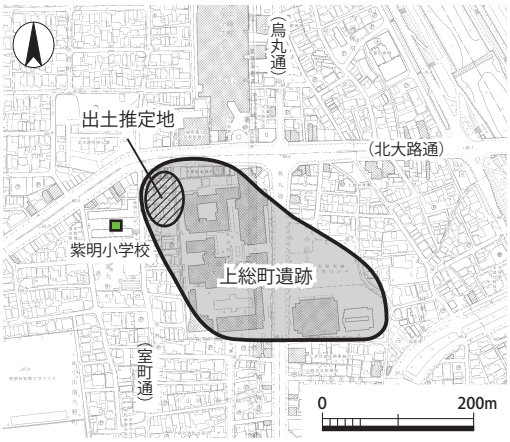


図１　推定地の位置（１：10,000）

２　経緯と経過

前述のように、本資料は平成５年以前から紫明小学校にて保管されてきたが、それに至るまでの詳細な経緯を把握している者もしくは発見者については現時点で確認できておらず、以下に述べる情報は当事者以外の人間による伝聞である。

まず、本資料の出土推定地（以下、推定地）については、小学校の室町通を挟んだ東側にかつて存在した塚からとされ、現在の室町通と北大路通の交差点の南東部と大まかな位置が判明するに過ぎず、詳細な出

写真１　集合写真

土状況等の情報はない。現在、推定地は周知の埋蔵文化財包蔵地である「上総町遺跡」の北西端部にあたる。

その後、時期・経緯は不明ながら本資料は小学校にて保管されることになったようである。そして、平成５年（1994）に（財）京都市埋蔵文化財研究所（当時）に本資料についての相談があったことが契機となり、研究所職員が小学校で遺物を実見し、簡易な記録を作成した。その際、展示のためのキャプションなども作成し、現在までに小学校の歴史の授業等で活用されつつ保管されてきた。しかし、不明な点が多かったことや学校側が主体的に保存・活用してきたこともあって、これらの遺物が何らかの形で外部に報告されることはなかった。

しかし、研究所職員としてかつて本資料を実見した丸川義広氏より令和２年に情報提供を受け、周辺の調査事例等を加味して検討を行った結果、本資料が付近の遺跡を考るうえで重要な資料と考えられたことから調査を実施した。調査では、まず資料の所在・状態の確認を行い、その後に小学校より資料を借り受けての図化作業及び写真撮影等を行い、推定地付近の現地踏査も併せて実施した。そして、ここまでの概要を令和３年度に報告した。

その後、推定地付近を含む旧「小山郷」に関する文献・絵図等の各種史料の調査を行った。また、これらの史料調査の成果を踏まえ、現地踏査を再度実施した。拙稿では、ここまでの内容について報告する。

なお、図化作業及び写真撮影の完了後、本資料は小学校に返却し、保管・活用されている。

３　地理的・歴史的環境（図２）

推定地は、京都盆地の北東部、賀茂川の右岸に位置する。周囲は賀茂川によって形成された扇状地が広がり、標高は北大路通と室町通の交差点付近で約69ｍとなり、北から南に緩やかに傾斜する地形である。

周辺では、これまでに縄文時代～近世にかけての遺構・遺物が確認されている。ただし、推定地近辺に限れば縄文時代や弥生時代前期に遡る可能性のある遺構が植物園北遺跡等で確認されているものの、弥生時代以前の遺構はそれほど多くない[3)]。

しかし、古墳時代に入るとその数は増加する。最も顕著なのが植物園北遺跡である。この遺跡は、推定地とは賀茂川を挟んだ東側に展開する遺跡である。古墳時代前期初頭では遺跡の全体で遺構が確認されているものの、特に遺跡の南東部と北西部に濃密な分布が認められる。続く古墳時代中期の遺構は全体的に希薄であり、現状では様相が明瞭ではない。しかし、古墳時代後期には再び検出数が増加し、遺跡の南東部と北西部で遺構が確認できる。飛鳥～奈良時代には、少数の竪穴建物と掘立柱建物が確認されるにとどまる[4)]。

周辺では、数が少ないながらも雲林院跡で古墳時代前期の竪穴建物、上総町遺跡で飛鳥～奈良時代の竪穴建物、上京遺跡・相国寺旧境内で古墳時代の竪穴建物や奈良時代の掘立柱建物などが確認されており、周辺でも植物園北遺跡と同様に古墳時代以降に遺跡数が増加する傾向が認められる[5)]。ただし、推定地を含む上総町遺跡では古墳時代の遺構が現状では確認されていない。

図２　京都盆地北東部の主要な遺跡（１：30,000）

また、集落跡以外には、植物園北遺跡の北側には幡枝古墳群、ケシ山古墳群、西山古墳群、林古墳群、本山古墳群、南側には半木町塚跡などの古墳が分布する。さらに、飛鳥～奈良時代には、北側の丘陵部付近を中心に須恵器・瓦の窯跡群が多く確認されている点は特筆される[6]。

平安時代には、植物園北遺跡や雲林院跡で遺構が確認されている。植物園北遺跡では前期の掘立柱建物が多数確認されており、そのうち１棟は三面庇を有する。また、雲林院は紫野の離宮「雲林亭」を前身としており、これまでに平安時代前期の園池遺構や井戸、掘立柱建物を確認している[7]。

平安時代中期～鎌倉時代にかけては、北側の丘陵部で瓦窯跡が確認されているものの、付近の土地利用は部分的なものにとどまる。しかし、室町時代に禁裏が現在の位置におおよそ固定化されると、それに伴い上京遺跡や相国寺旧境内などで活発な土地利用が認められる。ただし、これらの遺跡の北限は概ね上御霊通と考えられ、それ以南は都市化が進む一方、以北は村と田畑が広がる対象的な様相が想像される[8]。

近世以降の推定地付近の様相は絵図等で確認できる。『山城愛宕郡小山郷領地図』には、鞍馬口通沿い町家や寺院などが並び、それ以北は耕作地が展開している[9]。

この様相が大きく変わるのは近代以降である。都市計画図を見る限り、大正元年から徐々に鞍馬口通以北が開発され、昭和10年にはほぼ現在の道路・区画が完成している。都市計画図上では大正元年に小山付近に円丘状の地形が少数表現されているのみで、以降は一切確認できなくなる。

4　保管資料の詳細（図３～10）

本資料は36個体の資料からなる[10]。内訳は土師器（高杯）が４点、須恵器（杯・椀・高坏・鼓・瓶子・壺・甕・堤瓶・横瓶）が29点、埴輪（円筒・家形）２点、鉄器（馬具）１点である。古墳時代中期から平安時代までの幅広い時期のものを含む。

（１）土師器（№１～№４）

１～４は土師器の高坏である。１～３は小型で、形態・調整がよく似る。脚部や口縁部の大部分が欠損している。１のみ口径が復元でき、その大きさは12.6cmで、杯部は径に比して浅い。全体的に摩耗しているが、いずれも外面はミガキ調整である。また、杯内面にのみ赤色顔料が部分的に遺存する。１は杯内面に煤が付着するが、赤色顔料の上に付着していること、そして破面にも付着していることから、煤は二次的なものと考えられる。脚部を杯部に差し込むようにして接合している。４は脚部のみ遺存する。側面が面取りされ、断面は八角形を呈する。時期については、１～３が古墳時代後期、４が平安時代と考えたい。

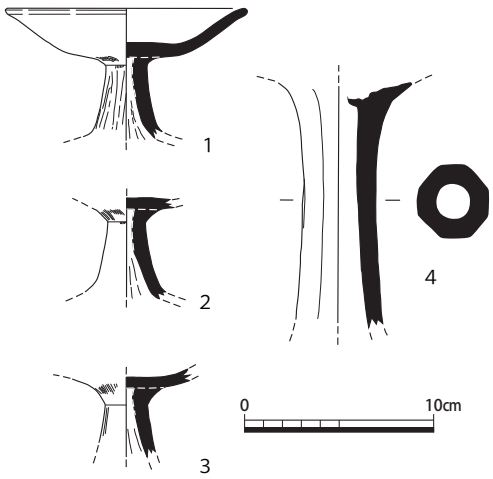


図３　資料実測図①（１：４）

（２）須恵器（№５～№33）

５～９は杯Ｈである。５・７・９が蓋で、６・８は身である。５・６、７・８がセットの可能性がある。５は口径12.1cm、器高4.2cm。天井部は径の3/4以上の範囲でロクロケズリを確認できる。天井部と体部の間の稜線は丸みを帯びており、ほとんど突出しない。口縁端部には面を有する。６は口径10.5cm、器高５.0cm。径の３/４以上の範囲でロクロケズリを確認でき、底部は丸みを帯びる。立ち上がり端部は面を有する。７は口径14.2cm、器高3.95cm。口縁端部に面はない。全体的に焼成が甘く灰白色を呈する。８は口径12.2cm、器高3.8cm。内傾する低い立ち上がりを有し、端部に面はない。焼成が甘く灰白色を呈する。９は口径14.2cm、器高3.6cm。５・６についてはTK23・47型式、７～９についてはTK43型式に位置付けられる。

10～12は杯Ｇである。10は蓋で、11・12は身である。10・11はセットの可能性がある。10は口径9.4cm、器高3.6cm。頂部には縦長のやや崩れた形態の宝珠つまみが付く。内面にはかえりが付くが突出の度合いは低い。11は口径9.0cmで器高3.75cm。12は口径10.5cm、器高4.2cm。10・11はおおよそTK217（飛鳥Ⅱ）型式に位置付けられる。12は11に比して径や器高が大きいことから、若干時期が下る可能性がある。

13は把手付椀である。口径10.8cm、底部径4.5cm、器高11.0cm。側面に把手が１つ取り付くが、把手部は欠損している。口縁部は緩やかに外反し、端部は肥厚して丸くおさめる。体部の中程には、二本のにぶい稜線があり、その間を１単位５～６本の工具を用いて波状文を施す。体部下半は手持ちヘラケズリとナデが確認できる。把手付椀については、出土例が少なく時期的な位置付けが難しいものの、形態・調整等からTK216～TK208型式と考えたい。

14は脚付椀である。体部及び脚部はともに焼け歪んでおり、計測部により若干の差異はあるものの、口径11.8cm、底部径8.1cm、器高14.1cmとなる。脚部は「ハ」字形に広がり、端部付近で一度屈曲する。

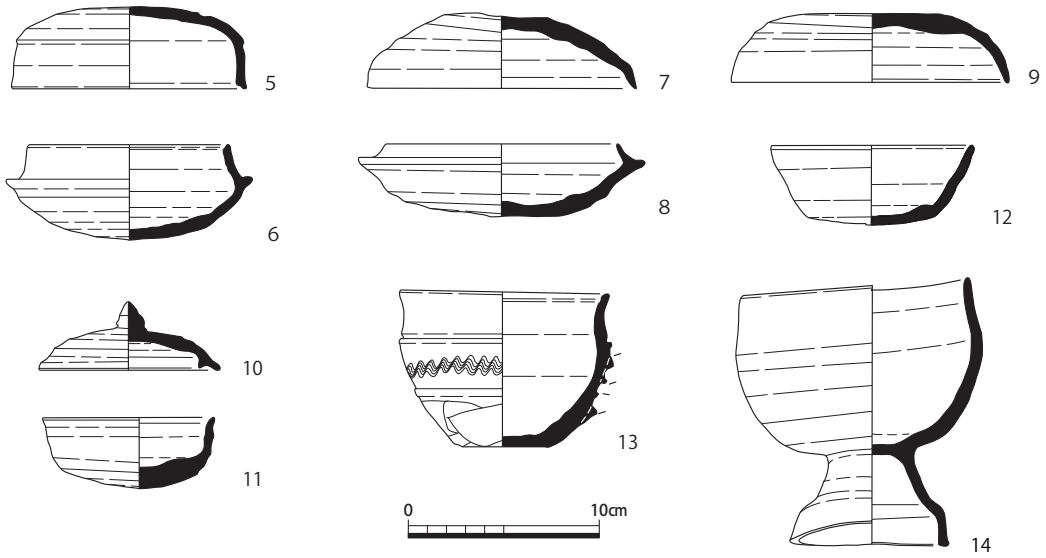


図４　資料実測図②（１：４）

TK209型式と考えたい。

15・16は低脚有蓋高杯で、セットの可能性がある。15は蓋で、口径13.8cm、器高5.0cm。頂部が僅かに凹むつまみが天井部中央に付く。天井部と体部の境には凹線が巡り、口縁端部には面を有する。成形後、乾燥の中途段階で再度ナデ調整を加えており、ロクロケズリの痕跡を擦り消している。16は身で、口径11.5cm、底部径10.3cm、器高7cm。杯部内面には、杯部と脚部の接合時についたと思われる強いロクロナデによる渦巻き状の痕があり、その中心に木製工具による押圧痕が残る。立ち上がり部に面はない。共にMT85～TK43型式に位置付けられる。

17は無蓋高杯である。焼成は極めて良好で暗灰色を呈する。杯部の下半部には2本の稜線が巡り、その間に右上がりの列点文が施される。脚部はラッパ状に外反して開き、端部には面を有する。2段3方向のスカシ孔があり、その上段と下段のスカシ孔の間に2条の沈線、下段のスカシ孔の下に1条の沈線を巡らし区画する。下段のスカシ孔の横には縦横各3本の線を交差させたヘラ記号が1箇所確認できる。口径12.9cm、底部径12.1cm、器高18.2cm。MT85～TK43型式に位置付けられる。

18・19は甕である。18は最大径が体部の中位よりやや上にあり、やや肩が張る。肩部付近に2本の凹線を巡らし、その間に右下がりの列点文を施す。また、1箇所のみ円形の穿孔が確認できる。口頸部は外湾して開いたのち、段をつくり、端部を上方外側へ摘まみ上げる。口径10.8cm、最大径18.2cm、器高14.6cm。TK216～TK208型式と考えたい。19は頸部以上は欠損している。最大径は体部の上位にある。無文で肩部に1カ所のみ円形の穿孔がある。外面下半部はナデにより擦り消されているものの、タタキ目と思われる痕跡が残る。最

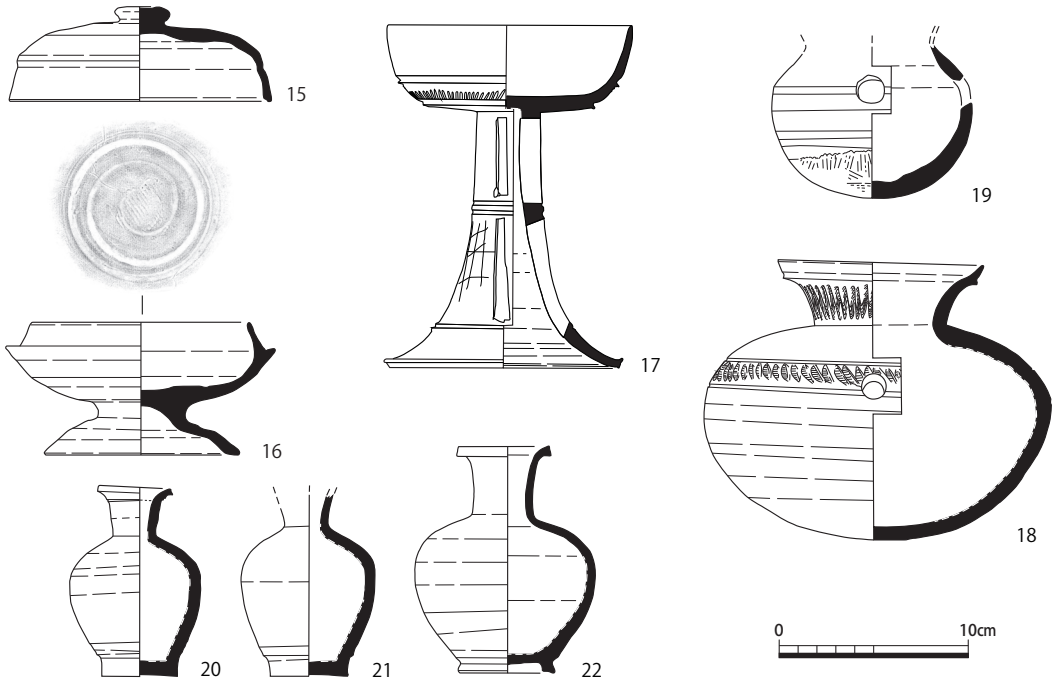


図5　資料実測図③（1：4）

大径10.6cm、器高8.0cm以上。TK43～TK209型式と考えたい。

20～22は瓶子である。21のみ口縁部を欠く。20は口径3.8cm、底部径4.0cm、器高9.5cm。21は底部径4.1cm、器高9.6cm以上。22は口径5.3cm、底部径4.9cm、器高12.0cm。20・21は底部に糸切り痕が確認できる。22は張付高台である。いずれも平安時代と考えられる。

23は小型の蓋である。口径から24とセットになる可能性がある。口径10.0cm、器高5.8cm。天井部中央に、頂部が凹んだつまみが付く。天井部と体部の境には凹線が巡り、口縁端部には面を有する。TK10～TK43型式と考えたい。

24は短頸壺である。口縁部は短く上方にのび、端部は丸く収める。口径7.8cm、胴部の最大径12.9cm、器高8.4cm。TK10～TK43型式と考えたい。

25は直口壺である。最大径は体部の中位にあり、そこから頸部に向かって緩やかにすぼまった後、口頸部は上方に向かって「ハ」字形に直線的にのびる。口径7.85cm、最大径13.1㎝、底部径5.7cm、器高12cm。底部はロクロケズリにより平坦である。体部に薄く「×」字形の線刻があり、これはヘラ記号の可能性がある。TK43～209型式と考えたい。

26は壺で、頸部以上は欠損している。自然釉の様子や調整が18とよく似る。体部の上位に最大径がある。肩部に2本の沈線が巡り、その間を1単位4本の工具を用いて波状文を施す。最大径14.6cm、器高10.5cm以上。体部下半には、部分的にタタキと思われる痕跡が薄く残っているものの、丁寧にナデ調整を加えて擦り消されている。TK216～TK208型式と考えたい。

27～29は広口壺である。27は口頸部の上半は欠損している。口頸部には現状で2本の凹線が巡り、これにより3つの区画に分けられている。最下段のみ無文で、それより上の区画には波状文が施される。体部は楕球形を呈し、体部全体でロクロナデ調整が確認できる。ただし、下半部では、タ

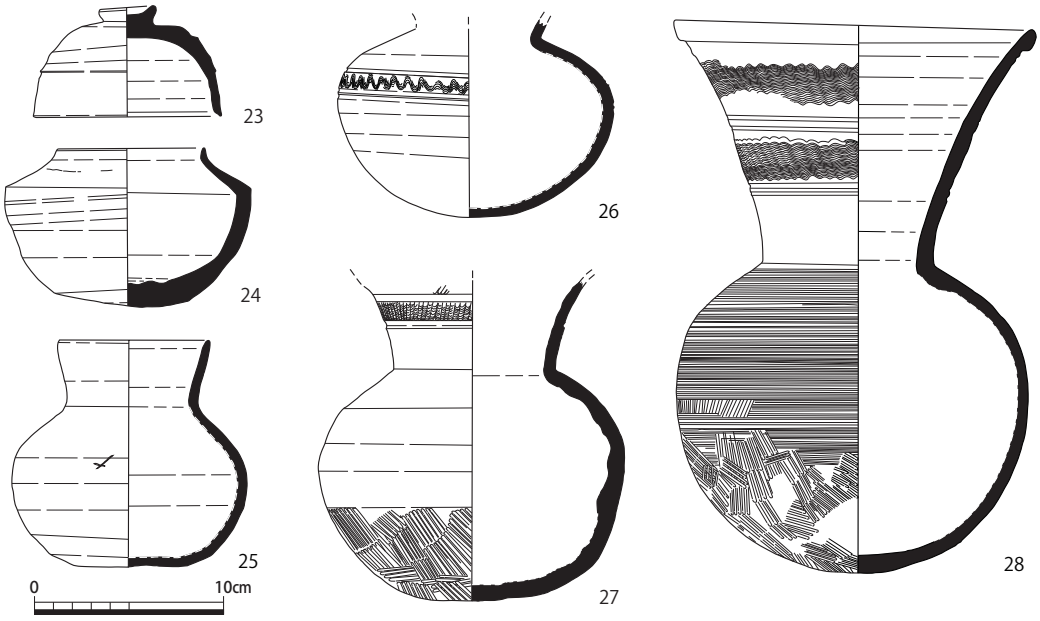


図6　資料実測図④（1：4）

タキ目が消しきれず比較的明瞭に残る。体部内面は当て具痕をナデにより擦り消す。最大径16.2cm、器高16.8cm以上。TK23～TK47型式と考えたい。

28は口頸部に2本1組の凹線が2組あり、これによって3つの区画に分けられている。また、口縁のすぐ下部にも浅い凹線1本のみ巡る。最下段のみ無文で、それ以外は波状文が施される。口縁端部は肥厚する。体部は球形で、上半はカキ目が確認できる。下半にはタタキ目が確認できるが、底部を中心に部分的にナデにより擦り消す。体部内面には当て具痕が残る。口径19.0cm、最大径18.55cm、器高29.3cm。TK10型式～TK43型式と考えたい。

29は平底である。口縁は「ハ」字形に開き、端部は外湾し丸くおさめる。口縁部は無文だが、体部の上半には3本の凹線があり、これにより3つの区画に分けられる。区画内はそれぞれ右下がりの列点文を巡らす。体部の中ほどはカキ目が確認できるが、底面との境付近にはカキ目を切って横方向のケズリが施される。このケズリは単位が短く、かつ単位の境に角が明瞭に残ることから、ロクロを用いていない可能性が高い。底面はナデ調整である。口径10.3㎝、底部径14.4cm、器高18.4cm。類例が少なく時期的な位置付けが難しいが、6世紀後半、TK43～TK209型式と考えたい。

30は脚付長頸壺である。体部の最大径

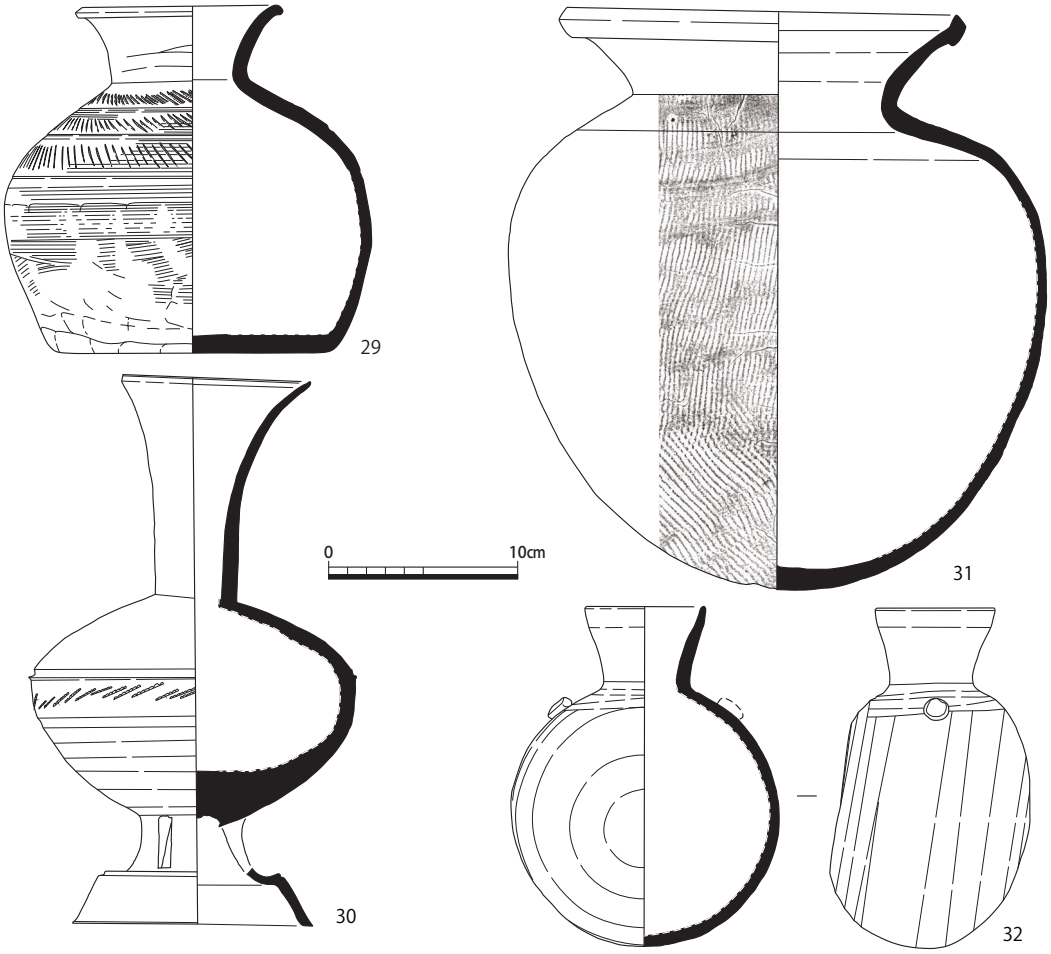


図7　資料実測図⑤（1：4）

は上位にあり、やや肩が張る。肩付近に2条の沈線を巡らせ、その間に右上がりの列点文を施す。脚部は下方にのび、中ほどで外側に屈曲して段をつけた後、再び直線的に開く。脚部の上半には長方形のスカシ孔が1段3方向に確認できる。口径9.9cm、胴部最大径17.3cm、底部径12.6cm、器高29.7cm。TK217型式と考えたい。

31は甕である。丸底で、最大径が体部の上位にあり、やや肩が張る。口頸部は外反した後に肥厚し、端部を上方へ摘まみ上げる。体部の外面は頸部から肩部までナデにより擦り消すが、タタキ目が確認できる。また、タタキ目の向きは体部の下から1/3までは右下がり、それ以上は右上がりもしくは縦方向に変化しているが、これは製作時の工人の体勢に起因する可能性がある。体部内面は当て具痕をナデにより擦り消している。口径18.8cm、最大径28.4cm、器高30.5cm。TK23～TK47型式と考えたい。

32は堤瓶である。体部は扁平な球形で、片面のみ丸みを帯びる。口頸部は細く、直線的に上方外側にのびる。内面の観察から、体部が2つ、口頸部が1つの計3つの部位を組み合わせて作られている。肩部には、頸部をはさんだ両側に各1つ、円形の粘土粒を貼り付けている。口径6.2cm、体部最大幅14.2cm、器高18.0cm。TK209型式と考えたい。

33は横瓶である。肩部に半円形の耳が2つ付くが、その片方と口縁部を欠損する。左側面は歪んでおり、焼成時の支え等の痕跡と考えられる。外面にはタタキ目、内面には当て具痕が残る。また、右側面の内面にのみ粘土を充填して孔を閉じた片面閉塞の痕跡が確認できる。以上のことから、右側面が開口した状況で叩き出しにより成形し、その後に開口部を閉塞、そして別作りの口縁部や耳を貼り付けた工程が考えられる。外面には自然釉が確認できるが、この釉は左から右に流れており、左側面を下にして焼成されたことが分かる。頸部付け根の径は8.3cm、体部の横幅38.4cm、器高29.6cm以上。TK209型式と考えたい。

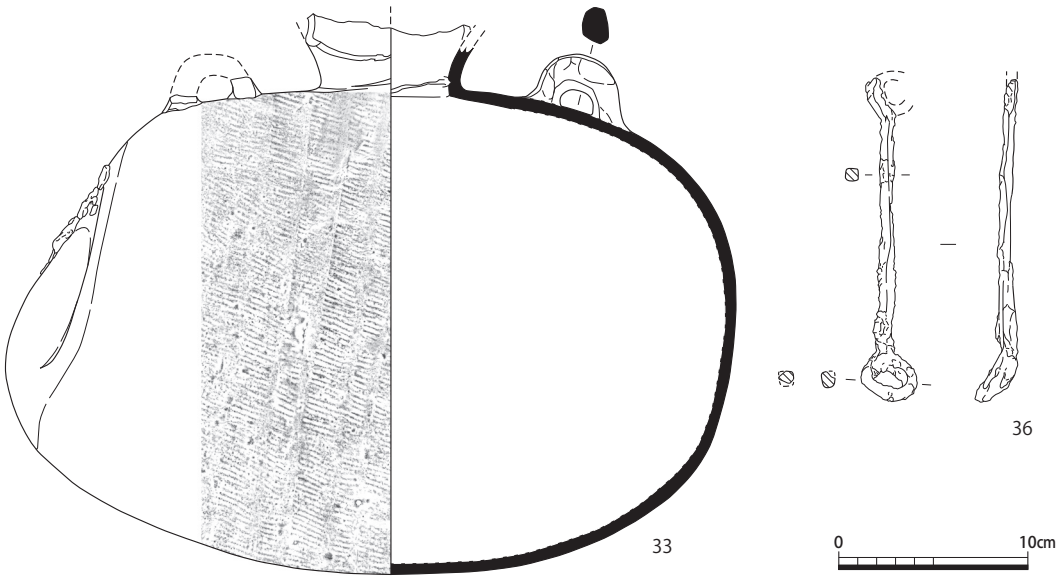


図8　資料実測図⑥（1：4）

（3）埴輪（№34～35）

34は円筒埴輪である。３条目突帯付近まで遺存する。全体的に摩耗する。胎土には長石を多く含む。突体はM字形を呈し、スカシ孔は2段目に直径7cm前後の円形のものが2箇所ある。最下段から3段目までにおよぶ縦長の黒斑が確認でき、３条目突体付近には赤色顔料が認められる。外面は縦ハケの後、ややストロークの長い横ハケが施されるが、現状では静止痕は確認できない。内面はハケ・指オサエ、ナデである。器高43.6cm以上、底部径27.2cm、底部高15.7cm、突帯間隔は2段目が12.7cm、3段目が13.3㎝。時期は埴輪検討会編年Ⅲ期と考えたい。

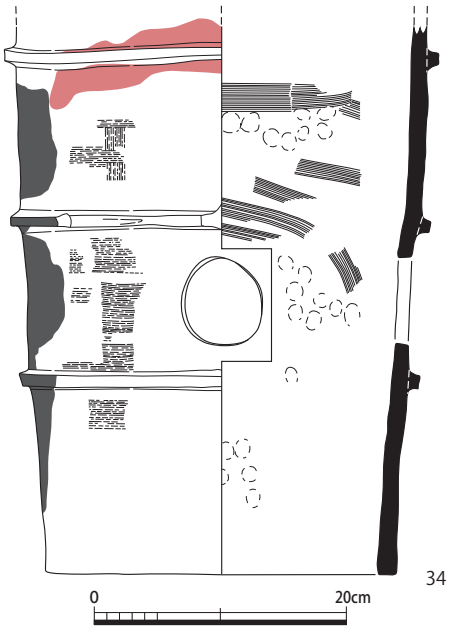
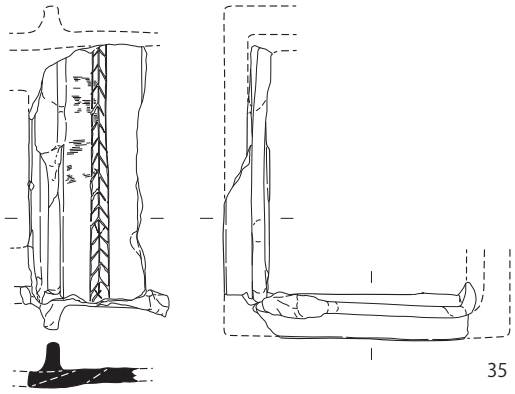


図９　資料実測図⑦（１：６）

35は家形埴輪である。図面から大きさを推定すると、おおよそ裾廻り突体部で短辺22.6cm、長辺26.2cm、壁面で長辺約22cm、短辺約18cmとなる。裾廻り突体より下部はほぼ欠損しているが、辺中央の下面は当初の面が遺存しているのに対し、両端部のみ破面となっていることから中央に長方形状のスカシや窓等があった可能性がある。裾廻り突体の少し上には綾杉文が巡るが、それ以外の装飾表現はない。部分的に赤色顔料が確認でき、胎土には長石のほか赤色斑粒を多く含む。破片資料であり全体像が不明である事から、現時点では34と同時期のものと考えたい。

（4）鉄器（№36）

36は馬具の轡と思われる。全体的に錆膨れが激しい。長さ17.1cm。両端部は環状を呈し、断面形は四角形に近い。肉眼観察で鍍金などは認められない。古墳時代後期の遺物と考えたい。



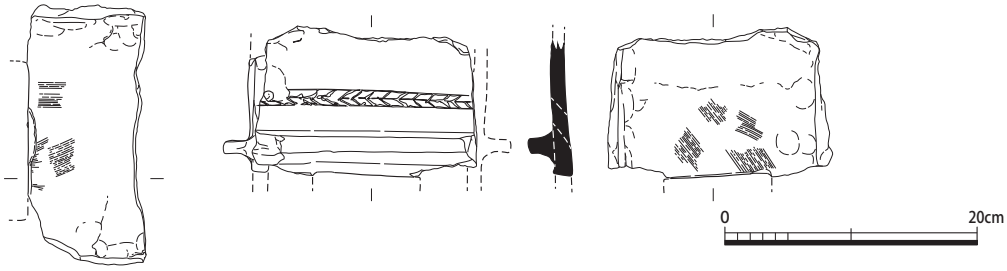


図10　資料実測図⑧（１：６）

（5）小結

以上、資料の報告を行った。点数は36点である。器種としては土師器・須恵器・埴輪・鉄器があり、時期は古墳時代中期初頭～平安時代にかけてのものが含まれる。その細かい内訳は古墳～飛鳥時代前半の遺物が32点、平安時代の遺物が４点である。また、古墳～飛鳥時代の遺物は①古墳時代中期初頭②中期中葉③中期後葉④後期後半⑤後期末葉⑥飛鳥時代前半の大きく６つの時期的なまとまりに分けられる。

5　本資料の意義（図11～13）

（1）本資料が帰属する遺跡について

先に触れた通り、本資料の出土状況等は一切不明である。しかし、資料の時期や状態を見る限り、１つの遺構から一括で出土した遺物ではなく、周辺で出土した資料が最終的に紫明小学校で保管される段階で集合したものである蓋然性が高い。ここでは本資料の内、上総町遺跡で遺構・遺物が殆ど確認されていない古墳時代から飛鳥時代前半の計32点の資料について考えたい。

推定地を含む上総町遺跡は飛鳥時代の集落跡として認識されており、大谷大学構内では飛鳥時代後半の竪穴建物が確認されている。しかし、それ以前の遺構は未確認である[11)]。これを踏まえると２つの可能性が想定できる。１つ目は、上総町遺跡の成立時期が遡り、飛鳥時代の集落域とは若干ずれた本資料出土推定地周辺に古墳時代の集落が展開していた可能性である。２つ目は、上総町遺跡に重複もしくは近接する位置に、性格を異にする未確認の遺跡が存在する可能性である。

現状では、本資料がそのいずれに帰属するのかは断定できない。しかし、少数ではあるものの埴輪が出土していること、そして完形もしくはそれに近い状態の資料が多く確認できる事から、ここでは未確認の遺跡に由来する蓋然性が高いものと考えたい。また、本資料の種類・時期・状態から古墳由来の遺物である可能性がある。

（2）絵図等による検討

これまで推定地周辺で古墳は確認されていない。付近一帯は、鎌倉時代に大野郷から分離して小山郷と呼ばれ、都市近郊の農村地帯であったと考えられる。しかし、近代以降に急速に開発が進み、現在では近世以前の面影を残す場所はほとんど認められない。ここでは、開発以前の推定地付近の様相が描かれた絵図等を見ていきたい。

ｉ）『山城愛宕郡小山郷領地図』（図11）

本図は写本で、天保９年（1838）頃の小山郷の様子を描いた資料である。鞍馬口通沿いに町家や寺院が並び、それ以北には耕作地が広がる。また、現在の室町通のやや西側には、南北に賀茂川から水を引き込む御用水路が流れ、これから網目状に派生した水路が耕作地内を縦横に走る。

ここでは、絵図に示されている以下の２つの点に注目したい。まず１つ目は、耕作地など間に認められる緑色で着色された表現である。この表現は図内の凡例によると「此色塚休堂」と表記されており、塚や堂などを示したものであることが分かり、少なくとも小山郷内に10箇所確認できる。このすべてが古墳であるか否かを確認する術はない。しかし、少なくとも江戸時代後期

図11　『山城愛宕郡小山郷領地図』（京都大学附属図書館蔵）※一部加筆

において、古墳の可能性のある隆起地形が小山郷内に複数存在していた事実を確認できる点は重要である。

２つ目は、図11上にａとして示した部分の土地区画である。ここには塚状の表現はないが、土地区画が前方後円形を呈している。このような区画は他に認められず特徴的である。また、『城州愛宕郡小山郷御社領高附帳』の写本には、前方後円形の区画からは外れるものの、その南東部に「鰯ヶ塚」の地名が確認できるという[12]。更に、室町時代の『親長卿記』には小山郷内に「岩志塚」や「岩志墓」と呼称されていた水田の存在が確認できるが、これは付近に存在した塚をランドマークとして、特定の水田を示す名称として使用したものと推測される。いずれも「いわし」と読めることから同一の塚を示している可能性が高く、これを踏まえるならば前方後円形の土地区画が古墳の痕跡を留めたものである蓋然性は

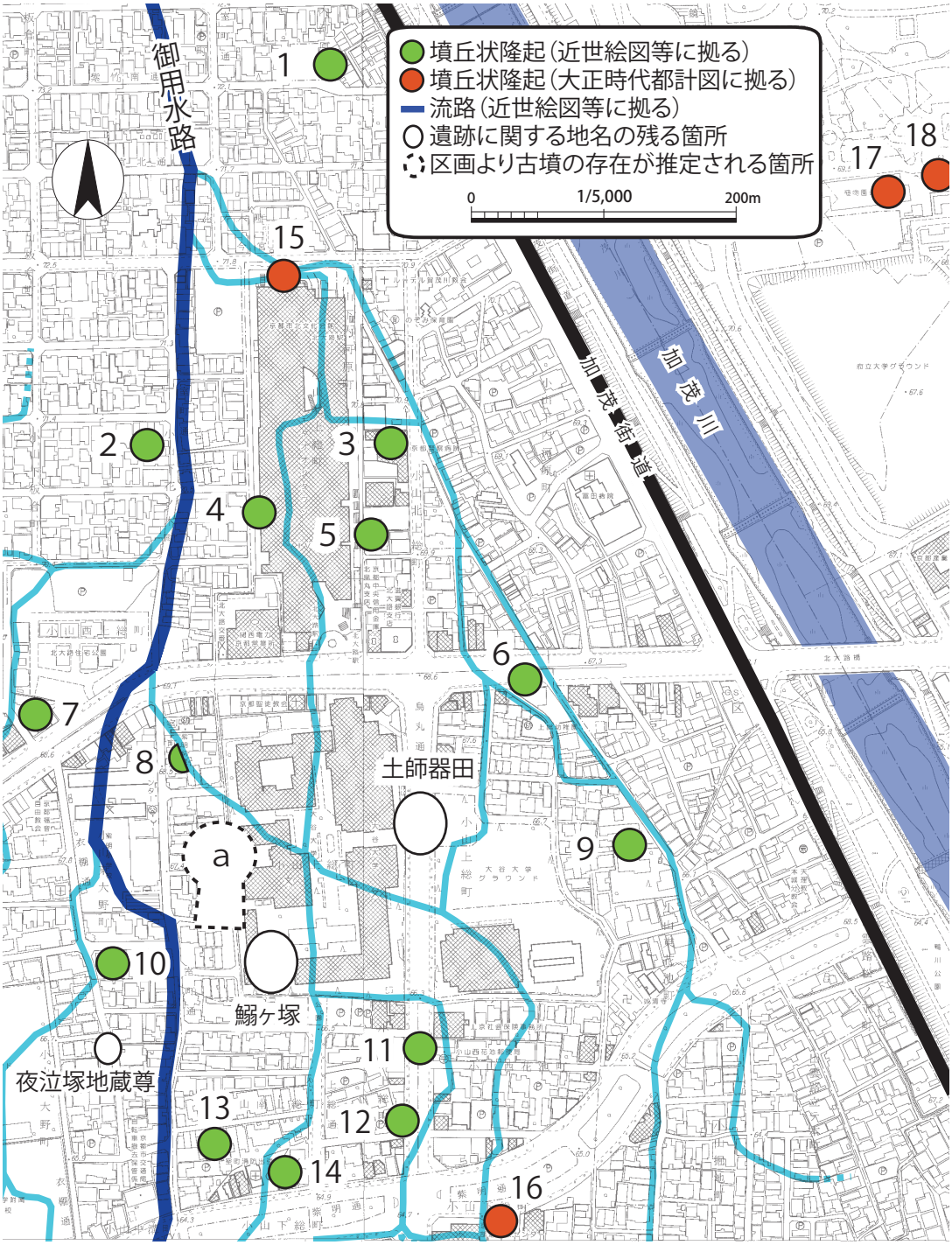


図12　古墳状隆起地形の分布（1：5,000）

高い。なお、小山郷には他にも「塚田」等の地名があり、これもかつて近辺にあった古墳に由来する可能性がある。

ii）『真宗大谷大学敷地実測平面図』

大谷大学が東京からの移転に際し、明治45年に予定地を測量したものである。

この図では、現在の大谷大学の敷地を中心に、前述の前方後円形の土地区画の付近も図化している。やはり、前方後円形の区画はここでも確認できるが、高まりなどは

表現されていない。しかし、図の西端には別の古墳状隆起の一部が表現されているが、そこのみ緑色に着色されており、墳丘が当時も遺存していたことが伺える。その位置は『山城愛宕郡小山郷領地図』の前方後円形区画の北西に存在する塚状の表現と合致しており、この図からも古墳の存在を伺う事ができる。

また、土地区画の形状・位置関係などが両図共にほぼ合致する事から『山城愛宕郡小山郷領地図』は、明治末に作成された『真宗大谷大学敷地実測平面図』と比して遜色なく、小山郷の様子を正確に表現した資料と評価できる。

（3）小山古墳群

前節では近世以降の絵図について検討を行った。その結果、小山郷に古墳の可能性のある隆起地形や土地区画が複数存在していたことを確認した。また、前章で報告した遺物の存在も併せて考えるならば、絵図に描かれた隆起地形等の全てがそうであるとは言い切れないものの、少なくとも古墳が存在した蓋然性は非常に高いと考えられる。以上を踏まえ、小山郷近辺に分布した古墳状隆起等を総称して小山古墳群と呼称したい。

近世以降の絵図などを参考に、現在の都市計画図に小山古墳群の位置をプロットすると図12のようになる[14)]。一部、賀茂川東岸のものも含んでいるが、古墳状隆起は18カ所、前方後円形の土地区画が１カ所となる。この分布図から見る限り、本報告資料が出土したとされる地点に近接するのは８号墳とａ号墳である。本資料は時期的に大きく６つのまとまりに分けられること、そして複数箇所から出土した資料が紫明小学校に集合している可能性が高いことは先に述べた。しかし、単純に一古墳一時期と想定すると、本資料には近接する２基の古墳以上の時期的なまとまりが認められることから、他の古墳からの出土品や追葬の際の遺物等を含む可能性も想定できる。

この図12を元に現地踏査を行ったものの、現在では古墳を想起させる痕跡は確認できない。また、絵図等と現在の土地区画の乖離が大きい事を踏まえるならば、近代以降の開発の波により小山古墳群は削平された可能性が高いものと考えられる。

なお、岩志塚（墓）については、『親長卿記』に水田の名称として登場することから、室町時代の段階で耕作に伴って既に古墳の削平が進んでいた可能性もある。

6　小山古墳群の位置付け

本来であれば、発掘により調査成果を積み重ね、然る後に遺跡の評価を行うべきである。しかし、小山古墳群は既にかなりの削平を受け、現在の各古墳推定位置には非木造構造の大型建物や道路が存在しており、今後の調査で良好な状態で遺構・遺物が確認される可能性は極めて低い。そこで、ここでは簡単にではあるが小山古墳群の位置付けに触れ、結びに替えたい。

まず、本資料には古墳時代中期初頭・中葉・後葉、後期中葉・末葉、飛鳥時代前半の各時期の遺物が含まれることから、小山古墳群の造営期間は古墳時代中期初頭～飛鳥時代前半と想定できる。これから、中期初頭の埴輪を有する古墳を契機として、以

降も造墓活動が継続した可能性がある。

また、墳形や群構成については断定できないが、絵図等から前方後円形のものが１基想定できるが、それ以外は比較的小型の単形墳とみられる。

京都市域では、これまでに約800基の古墳が確認されており、その分布状況は「西高東低」と表現される。それが示す通り、京都盆地北東部（幡枝・松ヶ崎・小山）における古墳の分布数は多いとは言えず、確実に古墳時代中期以前に遡るものは幡枝１・２号墳のみであった。また、ダブルマウンドもこれまで確認されていなかった。

幡枝１号墳については中期前半の古墳とみられるが、主体部が粘土槨と考えられること、銅鏡・管玉・鉄剣が出土していること以外は詳細不明で、正確な時期については明らかでない。しかし、本資料中にはそれと近い時期の埴輪が確認でき、かつ当該地域で埴輪を有する中期古墳は本資料を除けば他には認められない点は注目される。

これに加え、土地区画から前方後円形の墳墓の存在が想定できる事を踏まえるならば、小山古墳群の中に当該地域の首長墓の存在を想定することも難くはない。

この小山古墳群の造営母体については遺跡の位置関係から、賀茂川を挟んだ東側に展開する植物園北遺跡が最有力候補として

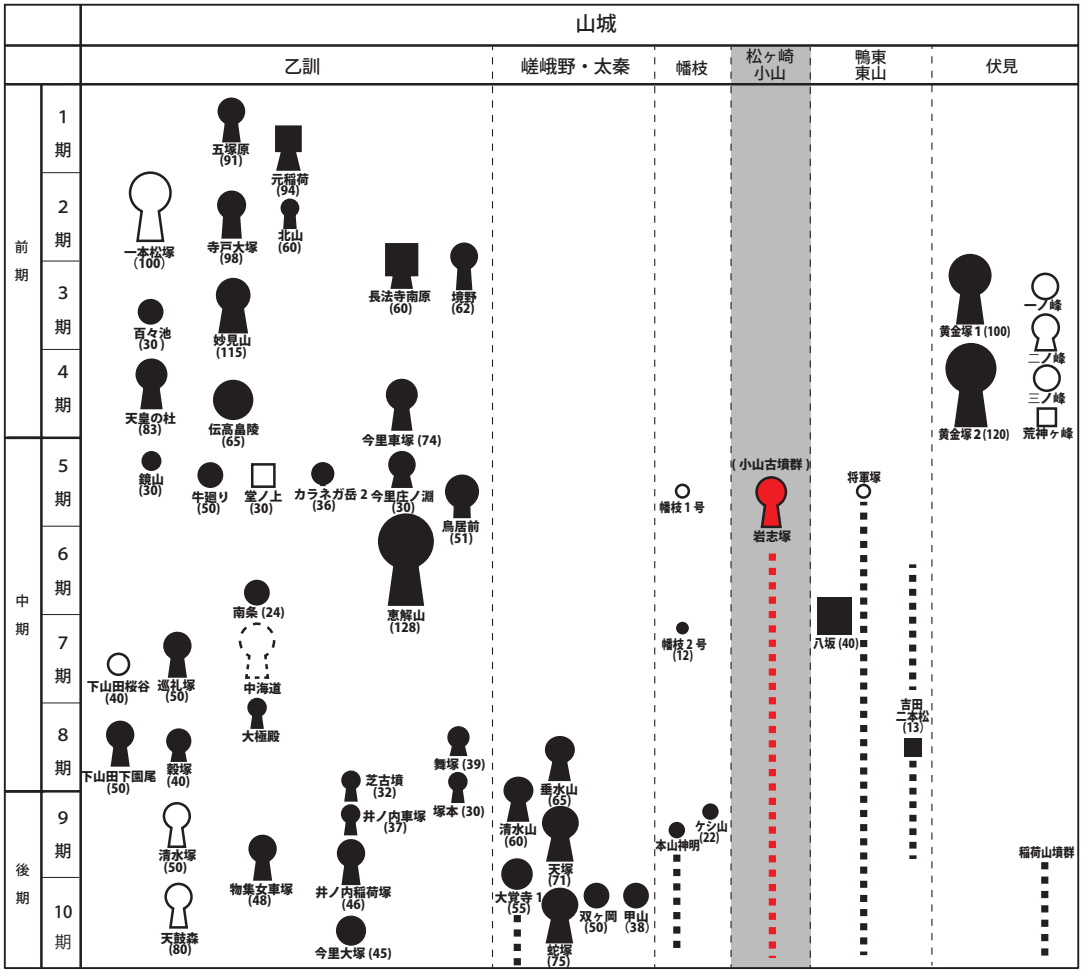


図13　京都市域の主要古墳編年

あげられる。また、本資料中にも存在する須恵器の把手付椀は、京都市域では類例が非常に少ない。その一つが植物園北遺跡で確認されていることは、遺跡の位置関係と併せて小山古墳群と植物園北遺跡との関係を示唆する傍証となろう。

植物園北遺跡は、山城地域北部では最大規模の集落と目され、古墳時代前期～中期前葉に活発な土地利用が認められている。しかし、それ以降は後期に入るまで遺構が希薄になる。このような動向は、山城各地で認められており、古墳の造営と集落の動態の不一致がこの地域の古墳時代史を考えるうえで課題の一つとなっている[15)]。

本資料は出土位置・状況等が不明であり、各遺物の有する個別の情報以上のものをこれにより断定することはできない。しかし、それは単に新たな遺跡の存在を示唆するに留まらず、京都盆地北東部や更に広い山城という範囲の古墳時代史を考究していく上で新たな視点を提供するものであり、非常に貴重な資料といえる。

今後の周辺域での調査・研究の蓄積に期待したい。

謝辞

執筆にあたり、大谷大学図書館、京都府立京都学歴彩館、鈴木善幸氏、上別府亜紀氏、山口大地氏、井手和子氏には多大な御助力を頂きました。感謝申し上げます。

また、丸川義広氏には本資料の情報提供のみならず、様々な事をご教示を頂きました。この場を借りて深謝いたします。

熊井（くまい）　亮介（りょうすけ）（文化財保護課　文化財保護技師（埋蔵文化財担当））

註

1）京都市文化市民局『令和３年度　京都市内遺跡詳細分布調査報告書』2022

2）令和４年８月５日に大谷大学図書館及び京都府立京都学歴彩館で絵図等の資料調査を実施した。併せて、同日に付近の古墳状隆起推定地の現地確認を行った。

3）財団法人　京都市埋蔵文化財研究所『昭和61年度 京都市埋蔵文化財調査概報』1986ほか

4）財団法人　京都市埋蔵文化財研究所『植物園北遺跡』2013

5）大谷大学『大谷大学構内遺跡発掘調査報告』1986、財団法人　京都市埋蔵文化財研究所『相国寺旧境内』2005、古代文化調査会『雲林院跡 - 紫野雲林院町の調査 - 』2017、古代文化調査会『上京遺跡 - 上御霊中町の調査 - 』2015

6）京都市遺跡地図提供システム（令和２年７月１日改）による。

7）公益財団法人　京都府埋蔵文化財調査研究センター『京都府遺跡調査報告集　第159冊』2014、京都文化博物館『雲林院跡 - 京都市北区紫野雲林院町の調査 - 』2002

8）山田邦和『京都都市史の研究』2009

9）『山城愛宕郡小山郷領地図』（京都大学附属図書館蔵）。本資料は写本で、天保９年（1838）頃の様子を描く。

10）借用時点の総数は38点だが、検討を行った結果、内２点が別個体と接合することが判明した。接合した資料は、30の脚付長頸壺と35の家形埴輪である。30は、脚部の破片が別個体の壺の口縁部としてこれまで認識されていた。また、35は２つの破片からなるが、接合すると同一個体であることを確認した。

11）報告書（1986）によると、SB４・５からの出土遺物は非常に少ない。遺構の時期については長胴甕から７世紀前半～中葉と推定する。ただし、長胴甕は時期的変化が乏しくSB４・５の時期については検討の余地がある。

12）『大谷大学構内遺跡発掘調査報告』（1986）によると、この地名は安政３年（1856）の『城州愛宕郡小山郷御社領高附帳』の写本で確認できるという。ただし、この資料は個人蔵であり、現在の所在は不明である。

13）『親長卿記』長享二年九月廿六日（『増補 資料大成』第40巻及び43巻）。

14）作図に当たっては『山城愛宕郡小山郷領地図』（京都大学附属図書館蔵）、『真宗大谷大学敷地実測平面図』（大谷大学図書館蔵）、『小山村全図』（個人蔵）、『大正元年都市計画図』を参考にした。

15）柏田有香・古川匠・浅井猛広「山城地域」『集落動態から見た弥生時代から古墳時代への社会変化』2016

【参考文献】

平安学園考古学クラブ『陶邑古窯址群Ⅰ』1966

田辺昭三『須恵器大成』1981

埴輪検討会『埴輪の分類と編年』2022